

闇 下 櫻 人

帝都歴史妖怪奇譚 其ノ一

Adult
Only



怪異は元々『そこ』に在ったのだ。



闇 下 櫻 人

帝都歴異妖者奇譚
其ノ



序之零・帝都歴異妖者奇譚

漆黒。

どろりの空。

夜。月はなく。星々も灰色の雲に遮られた重い夜。

主のいなくなった純白の江戸城も。立派な元武家屋敷も。人々で賑わう長屋も。真新しい洋館も。高く高く聳え立つ凌雲閣も。何もかもが例外なく漆黒の、墨のような闇中に在る。

満開の時期を超え咲き乱れている桜も、その例外ではない。せつかな花片はなびらが時折はらりと仲間から離れ、不規則に宙を舞い、音もなく地面へと落ちていく。

常闇色の空気にほんのり甘い香りを漂わせ、花片がちらりちらりと降る中で……琵琶の音ねが風に乗ってくる。重なるよう、暖れた老人の声も聞こえる。

浄、浄、浄、と。重く儚く響く琵琶に合わせ、枯れ声の琵琶法師が歌を紡ぐ。

主がいなくなり。年号が変わり。すっかり様変わりしてしまった、この街のことを。

魔都と化した、帝都のことを――



序之一・江戸城無血開城

その日。抜けるような青空の下。桜が咲いていた。

満開の桜は盛りを過ぎ、僅かな風でも大量の花片が木と別れ、自ら青空へ吸い込まれていくように舞い狂っていた。

その風景は市井しせいだけでなく、そこ……江戸城でもだ。

江戸城——この日本を統べる政治の中枢であり、国の主である将軍と、その一族が住まう白亜の巨城。

そこでは、毎日、日本の為に大勢の者が働いていた。四六時中、様々な人が行き交い、賑やかでないことの方が難しい場所である。

だが、今日は違う。

静かだった。人はもう、数えるほどしか動いてはいない。活気は皆無に等しい、冷たい場所と化していた。

桜吹雪の下。いくつかある門の中でも、主のみが使うこととの許された中央門。その前の長い橋の上では、袴姿で神妙な面持ちの武士もののぶが、左右の欄干に沿って、ずらりと並んでいた。それは橋を渡りきった大通りのずっと向こうまで続いている。

全員、苦々しくこの日を迎えた。これが最後の奉公だと

嘯みしめていた。

固く閉じられていた観音開きの門扉が、ぎいと小さく音をたて、肅々と開いていく。

いよいよ、そのときが来たのだと、橋上の者達の表情に硬さが増す。悲しみが額に刻まれる。伝播していく。大通りに並ぶ者達にまで。隣の者の表情でそれを悟り、皆が皆、ずどんと重い気持ちになる。

頑丈で豪華な扉の向こうから現れたのは、豪華絢爛な江戸城とは不釣り合いな、簡素な行列であった。

二十人ほどの武士が二列を作り先頭を歩き、そのすぐ後ろに高貴な者が乗っているであろう大名駕籠が二挺。その後ろにも三十人ほどの武士が二列に並んでいる。

行列には違和感があった。

まず、駕籠の中の者達の荷物が行列に見当たらない。旅路につくのか、引越しをするにしても、荷物がまったくないというのはおかしい。そして、近所に行くには仰々しすぎる。見送りをしている者達の数も、ついそのままで行くには多すぎる。雰囲気も物々しい。

それもそのはず。駕籠に乗っている者達は、旅に出るのでもなく、所用で出かけるでもない。自分達の使っていた絢爛豪華な家具、衣装、装飾品、何もかも置いて、江戸城を離れることとなってしまったのだ。



先に行く駕籠は赤。將軍の妻が乗っている。その後ろを
行くのは、黒の駕籠。乗っているのは將軍の母だ。

先に江戸城から出ざるを得なくなってしまった、夫であ
り息子である將軍の為に、女達は努力した。

『ここにずっと住まわせて欲しい。夫を、息子をここに戻
して欲しい』と、嘆願書を書き、方々に手を尽くした。

しかし、その努力は、時代の波に、外国からの要求に抗
えず——このような結果となってしまったのだ。

ゆっくり、ゆっくり……名残を惜しむように行列は行く。
桜色の空気の中を、のろのろと進む。

まるで、葬列——
赤い駕籠の後部を担いでいる若い駕籠者が、はつと頭を
上げた。中から聞こえる何かに耳を澄ませている。

青年は何を聞いたのか。切なげに目を見開き、じわりじ
わりと細め、やがて、苦悶に眉を顰め、がくりと首を折つ
た。笠に隠れていない唇は何かを耐えているのか。それと
も、不甲斐なさに歪められたのか。音をたてそうなほどき
つく噛みしめられている。

静かに静かに行列は行く。そこに並ぶ苦い貌をした武士
達が次々に頭を下げる。葉に触れられた含羞草ねむりくさのように。
首に鉛をつけられたかのように、重々しく。

——皆、声なき涙に濡れながら。

——ひとつの時代の終わりを、硬く拳を握り締め、小刻
みに震わせて……切実に痛感しながら。



序之二・帝都誕生

研鑽された航海術や、未知の国への冒険心。そして、商人達の野心で、世界各国が新天地を目指し、七つの海や多くの大陸を巡っている中、日本はその浮かれた列強には左右されず、必要以上にゆったりと時を過ごしていた。

黄金、白銀、その他諸々の豊富な地下資源により、日本は大変豊かであるので、無理に列強と争わずとも、国は成り立っている。

それを理由に、将軍が統括する幕府は、頑なに現状維持を貫いていたからだ。

やがて、列強はこぞって日本にも大挙し始めた。彼らの狙いは、黄金の国と称されるほどの、豊富な地下資源であった。

列強の商人相手であろうと、政治家であろうと、幕府は唯我独尊の姿勢を崩さないでいた。得も選ばない代わりに、損も選ばない。今のままであることのみを望み、何者をも受け入れることはなかった。

その事実強く不満を持ったのは、地方の大名達だった。戦国時代を通り抜けた後、武士とは名ばかりの商人達が増

えていた。特に地方は顕著だった。

幕府の商売下手に業を煮やした者達が徐々に増え始め、国が豊かになる機会を損失してはいけないと発起した。

その団体に目をつけたのは、列強のひとつ、英国だった。団体の一大勢力……薩摩の代表と英国の代表の間で話がついたのを皮切りに、日本各地で反乱が勃発。やがて、幕府はその座を追われることとなった。

今まで国を動かしていた幕府は解体され、新しい組織、政府が作られた。

政府は、江戸を帝都と改め、年号も帝都歴と変更した。そういった動きの中で、幕府の主である将軍一族は、住居である江戸城を追われることとなった。

まずは、将軍が江戸城から追い出された。

政府の動きを由としない将軍の妻と母は、江戸城に立て籠もり、妻と縁のあった薩摩代表に交渉を持ちかけた。

だが、妻と母の願いは叶わず、将軍と同じく居城を後にせざるを得なくなった。

こうして、江戸城は主を無くし、誰もいなくなってしまう。

その後、このようなことになるなど、誰が想像したであろう。



この世界には人間だけでなく、異妖者ことものという人外も、多く存在している。

長く時を経た食器や雑貨が魂を持ち、妖怪へと変化して、そのまま蔵に住み着いたり。

二十年を超えて生きた猫の尾が割れ、行灯の油をぺろりぺろりと舐めたり。

柳の傍らに、ぼんやりと立つ影の薄い幽霊がいたり。

極稀に、羽目を外した彼らの大集合、百鬼夜行よかげが空を横切ることもあるが、それら人外は、概ね夜影よかげに息を潜め、ひっそりと存在する程度だった。

特に江戸城は、古い物が多かった為か、それとも富や権力の象徴であった為か、人の妬み嫉みが招くのか。異妖者が多く居た。

それが、將軍不在となつてから、益々、増え始めたのだ。

一匹が二匹、二匹が四匹と、蝦蟇がまの油売りの口上のように異妖者が増えていく。夜影にひっそりしているどころか、日中にもふうらり現れ、人々にひいと悲鳴を上げさせた。あれよあれよと増えたそれは、とうとう江戸城中に蔓延はびこり、豪華絢爛な城は、人の出入りを許さぬ伏魔殿となつてしまった。

そこを政治の中枢にしようと思つていた政府は、異妖者

退治を決行した。

何十、何百人もの祓い屋、陰陽師、坊主、山伏、果ては神父、牧師まで連れて来たのだが、誰もどうすることが出来なかった。

その中の一人がこう言った。

「江戸城は、元々こういつたものが多く集まる位置にある。仄かに漂う呪力の名残で察するに、それを抑えていたのは、江戸城に住まう主の血筋を利用した呪術だろう。それで異妖者の動きを抑えていたのであるが、主がいなくなつたことで、呪術の効力が皆無となり、ここは本来あるべき姿に戻つたのだ。これは諦める以外、方法はない」と。

退治してもしても溢れる異妖者は徐々に江戸城から漏れ、帝都のあちらこちらに住み着き始めた。

どうすることも出来ぬこの事態を、帝都の人々はどうしたかという……受け入れたのだ。

今ほどの数ではないが、元々、異妖者が存在し、見慣れていたことと、地方からやつて来る人間を受け入れることに慣れてきた為、人々は大量の異妖者を受け入れることに、あまり抵抗がなかったのだ。

こうして、多くの異妖者が幽走する魔都『帝都』が誕生したのである。



一、長軀デ怠惰ナ用心棒

帝都に変わっても。異妖者が増えても。それらすべてをすんなり受け入れた住人達は、極々普通に日々の生活を続けていた。

それはここ、帝都の中にある最大の歓楽街、吉原でも同様だった。

高い塀に囲われ、赤い提灯が無数に灯る夜闇の街中に、人が集う。嬌声をあげる。男と女が交じり合う。

街が江戸であろうと。帝都であろうと。そこには毎夜、こうして大勢の客がやって来ては、女と懇ろになる為、多額の金を落としていく。

その有様を『行灯に舞い寄る羽虫のようだ』と思いがながら、中堅処の遊郭、花圃楼かほろうの二階窓の張り出しに座り、ぼんやりと眺めている長髪の青年は、啞えていた煙管を指で挟み、コンツと灰皿に叩きつけた。

名残の紫煙を、少し分厚い唇の隙間から気怠げに吐く。力なく戸袋に背を預けている姿と同じく、纏っている黒の着流しもだらしなく崩れていた。胸元は大きくはだけ、腹まで露わだ。右足を張り出しに乘せている為、裾も派手

に開き、六尺の白い端が覗いているが、本人はおかまいなしだった。

引き締まった長い腕が畳に伸びる。そこには丸盆がひとつ。上には銚子と猪口がちよこんと乗っている。

青年の大きな掌は猪口を取らず、銚子を包み込んだ。それを口に宛がい、緩慢に中身を煽ると、ほんのり温まった息をつく。

彼がこうして暇を持て余していることは店にとって良いことなのだが、彼自身は退屈でどうしようもなく、酒を煽るか、煙草を喫むか、行き交う人々を夢想の中の生き物のように思いつながらぼんやり眺めるかしか時間の潰しやうがなかった。

「雨月」

廊下が続く襖の向こうから声がしたと同時に、カラリと開かれた。

『雨月』。それが青年の名だ。腰を捻り、雨月は右目でそちらを見る。

「仕事だよ」

乾いた声でそう言ったのは、この遊郭のおかみだった。短い言葉をひとつ吐いただけだというのに、年相応の白いものが混じった鬢びんに指を添え、ふうと重い溜息をつく。



「なんだ、また百貨店のボンが酔っぱらって暴れてんのか？」

「いや、お武家さんだよ。何もかも気に入らないって怒鳴りだしてね。ありや、八つ当たりさ。もう四年にもなるってのにねえ。情けないったらありやしない」

廊下でおかみが愚痴を零している間にのっそり立ち上がると、雨月は箆箆に立てかけておいた刀を手に取り、まだぼやき続けている彼女の元へ、ゆったり近寄った。

鴨居が雨月の頤おとがほの下にある。六尺六寸とかなり長軀の雨月には低すぎるのだ。

「ほんと、お前みたいに、さっさと割り切りやいいのにね」
我が子を褒めているかのような誇らしげな貌をしておかみだったが、大きな一枚壁のような胸元に目をやると、これまた我が子を叱るように表情を変え、「だけど、店の子にあんまり手をつけるんじゃないよ」と、小言を零しながら、着崩れている着物を直し始めた。そこに生々しくついた女の紅と吸った跡を隠す為。

「寝てるよこ勝手に入って来られたんじゃ、どうしようもないだろ」

慣れた挙措きよそで大きく頭を下げ、檜の鴨居を潜る。小さな悪戯を叱られた子供のように笑っている雨月の顔を、お

みは少し力を込め、「めっ」と両掌で挟み込んだ。

シヤランと小さく鎖の音が響く。雨月の左目につけられている眼帯からだ。

銀で造られたそれは、雨月の左目をすっぽりと包み込む楕円。表面には曲線と文様が駆使された繊細な意匠が施されている。それを固定しているのも銀製の鎖。鎖を繋ぐ為、本体に開けられた穴には、別個、きらきら煌めく極々細かい銀鎖の束がぶら下がっている。音がしたのはそれが揺れたせいだった。

「いいから、さっさとしな。一階の菊の間だよ」

「はいはい」
のろのろ、帯に刀を差すと、雨月は年季の入った赤茶色の階段箆箆に足をかけた。

階段を下り、帳場を抜け、脂色やにに染まった引き戸を潜ると、その向こうは別世界だった。

朱塗りの壁。点々と続く赤提灯の列。緋毛氈ひもうせんの敷かれた廊下。そこへ雨月が顔を出すと、その上でゆうらり泳ぐ金魚のような遊女達が、次から次へと近寄って来た。

「ああ、やっぱり、あんたが呼ばれたんだね」

「早く行ってやってよ。お凜ちゃんが大変みたいでさ」



「ほらほら、急いで、急いで」

口ではそう言いつつ、くすくすと笑いながら、遊女達は雨月を足止めするようにしなだれかかり、袖を引く。

「ほんとにそう思ってたなら通してくれよ。でない、このまま引きずってくぞ？」

本当に数人を軽く引きずりながら歩いた雨月に、遊女達は嬌声をあげ、三々五々に散っていく。

まだ響く遊女達の嬌声を背に、雨月は目的の部屋へと向かう。

どこかの部屋で客が頼んだのだろう、遊女が奏でる三味線の音がする。あつちでは金比羅船こんびらふね々に興じる声。こっちは投扇興とうせんきょうに一喜一憂する声。

それらを耳にしながら、中庭に設えられた小さな太鼓橋を雨月が渡っていると、橋の下の池で、立派な錦鯉がパシャンと尾で水面を打つ音が届いた。

廊下の角を曲がる。大菊の管物くだものが欄間らんまに描かれたそこが、おかみに言われた菊の間だ。

その前にたどり着いた途端、雨月の耳に聞こえて来たのは、華やかな遊び音ではなく、膳をひっくり返し、それらが畳の上に散らばる音と、女達の悲鳴。

中にいる者の許可を取ることなく、雨月はかろりと引き

戸を開けた。

部屋にいたのは、武士姿の中年男と、遊女が一人に禿かむろが二人。

男は、怒りに肩を震わせ、爛々と目を血走らせ、前に座り込んでいる遊女を睨みつけていた。遊女の背には脅えた禿達。なんとかこの場を収めようと遊女は気丈な目をしてはいるが、眉は困惑に歪んでいた。

「ういーっす」

緊張にそぐわぬ暢気な声で、雨月が場を崩す。

「なんだ!？」

激昂で目を剥き、口角泡飛ばしている男とは対照的に、女三人はほっとした笑顔で雨月を迎えた。

「お客さん。ここは粹に遊ぶ所だぜ。野暮は止めましょうや」

よっこらせと鴨居を潜り、雨月は悠々と男に近づく。

「黙れ! 金は払っているのだ! どうしようと、儂の勝手だろうが!」

「そんなこたあねえ。場には、そこにふさわしい態度ってもんがあるんだよ。あんたも武士ならわかるだろ?」

「喧しい! 髪も結っておらん貴様に、そんなことを言われる覚えはない!!」



怒りの矛先を雨月に向けた男は、きつちりと鬚まげを結っている。

しかし雨月は違った。長く少し癖のある黒髪をそのまま腰まで垂らし、適当に切られたざんばらの前髪は、目の下まで伸びている。

「こんな俺に諭されるのが厭なら、粹に遊びましようや」

「う、五月蠅い！ 貴様まで儂を愚弄するか!! 儂は武士だぞ！ 世が世なら、貴様らなんぞ、切り捨てられても文句も言えん立場だとわかってるのか!？」

「でも、今は違うでしょうが。というか、武士を名乗るなら、こんなとこ破廉恥だつて近寄らないもんじゃありませんか？」

「くっ……!!」

男はぎりりと歯を噛みしめ、震える手で刀を抜いた。

禿二人が悲鳴を上げそうになったが、遊女が唇の前に人差し指を立て、二人を止めた。

「安心して、見てご覧」

低い雄叫びを上げ、男は刀を振り上げ、落とす。

勢いのある、鋭い一振りだった。確実に獲物を捕らえていたはずだった……が、男は目を剥いた。

そこにいたはずの雨月がない。空を切った刃は虚しい風音をたてただけ。何かを斬ったという手応えもない。何

もない――。

呆然としている男の手首を、大きな右手が掴む。驚きに、ひっと短く声をあげた。

「あーあ、抜いちまった。もう駄目だ。出てって貰うよ」
雨月の声は男の頭上……しかも、背後から響いた。

男が一振りするうちに、雨月は身を低くして大きく踏み込み、一瞬で背後へ回ったのだ。

「くっ、ぐうっ……!!」

がっちりと掴まれている為、男の手首はびくりとも動かない。

ただの街の男なら、そこでへなへなと頽くずおれていただろう。

だが、男は武士。ある程度の心得もある。矜持もある。圧倒的な実力差に頽くずおれたくともそれも出来ず。頭ふたつほど背丈の違う、矢鱈やたら俊敏な雨月の顔へ、ぎりぎりぎりぎりと首くびを廻めぐらせた。

涼やかな鋺こぶ擦れの音がする銀眼帯を目にすると、男は驚きと懐かしさを緋こい交ぜにし、声に乗せた。

「貴様、雨月か？ 江戸城の掃除屋の……」

「なんだ。あんた、元お仲間か」

「貴様のような下賤と一緒にするな!!」



目を血走らせ、男は怒鳴った。

「儂は、生まれた時から武士だ！ 由緒正しい出自だ!!
それ故、城でもそれなりの役職についていた!! 得体の
知れぬ汚れ物を扱っていた貴様と一緒にするな!!」

「その生まれた時から高貴なお方が、粹に遊ぶとここで女相
手に八つ当たりで怒鳴り散らして、こうやって手首掴まれ
て動けなくなつて……情けなくないのかねえ」

露骨な揶揄を孕む雨月の言葉に、男は殊更、目を剥いた。
「あんた、武士って名乗つても、それだけなんだろう？
軍人や華族に鞍替え出来たのは、金持ちばっかだ。そこ
も滑り込むことが出来ないわ、感情を持って余すわ、挙げ句、
こんなことに……惨めだねえ」

射貫くような男の視線を真正面から受けても動じず、雨
月は、くくく、と含み嗤いを漏らした。

興奮が度を過ぎ、なんと言葉を紡いでいいか思考が追
つかなくなつた男は、鉢の中で空気が足りなくなつた金魚
のように口をぱくつかせている。

そんな男の元に、四角い岩のような面構えをした男が二
人、やつて来た。どちらも、着流しの下に巻いたサラシに
七首あいくちを差している。ここらを統括している地回りの手下達
だった。

「お客さんがお帰りなんで、よろしく」

「へい」

「こつち来い、オラ！」

やくざ者達は、怒りで過呼吸を起こしかかっている男の
左右を固めると、それを引きずるようにして、部屋から出
て行った。

立ち回りが終わった部屋の中の緊張がふっと解け、女三
人は同時に大きく息をつき、表情を和らげる。

「助かったよ、ありがとう。雨月さん」

「ま、仕事だしな」

へっと、唇の片端を上げ嗤っている雨月の右掌には、銀
色の平たい箱状の物が光っていた。

逞しい指が脇についている留め金フックを押すと、ぱくんと箱
が開いた。中には西洋の紙巻きが整然と並んでいる。

「あら、舶来品」

「武士だ、鬚だ、生まれだなんて言つといて、こういうモ
ンには手を出してんだぜ。そんな半端な気持ちだから、粹
な場で、みつともねえことすんだろな」

雨月は、紙巻きを一本取りだし、啜える。褒めて貰おう
と期待した笑顔で、禿の一人が隣寸を擦った。

「おう、あんがとさん」

期待通り、雨月に褒められた禿は頬を染めてはにかむ。



「そいや、怪我はねえか？」

「あたし達は大丈夫さ。それより雨月さん。それ、さっきのお客さんのだろ。いつの間に拘ったんだい」

「後ろ取った時にな。ま、財布と煙管はお兄さん方への駄賃で取らずにおいたんだ。これくらいは、いいだろ？」

男が引つ繰り返した膳は一つだけのように、まだ残っている膳の上に酒を見つけると、雨月はその前にどっかり座り込み、銚子を手に取り、煽った。

「また、そんな飲み方をして……あたしがいるんだから、お酌させておくれよ。お礼にさ」

凜が雨月からそつと銚子を取り上げると、禿が空いた手に猪口を置く。

静かに注がれる酒を、雨月はぼんやり見つめていた。

「さあ、どうぞ」

と、促されるまま、杯を空けた。

「どうしたんだい？」

凜にそう言われ、雨月は少しぼんやりしている自分に気がついた。

「ちよつと思ひ出してただけさ」

「江戸城にいた頃のこととか？」

「ああ」

「今は、人相手の立ち回りばかりだものね」

「そうだな……つまんねえ」

「あら、どうしてだい？」

「どうやっても勝つからさ」

凜はふふ、と笑って、空になっている雨月の猪口に酒を注ぐ。

「まるで、怖いものなんか無いって言ってるみたいだね」
「くい、と盃を空けてから、酒に染まった吐息と共に漏らした。」

「怖い、か……」

刀を持つと心が躍る。が、斬り合いたいのは、常勝が確定している人間ではない。

「俺が斬りたいのは……」

酒を口にする。内臓を焼く液体と共に、続く言葉を胃の腑へと落とした。諦めきれない思いと共に……

○ ○ ○

静かな昼が過ぎ、また賑やかな夜が巡ってくる。

今宵は一際、吉原の夜が艶やかだった。

満開の桜の下、馬蹄型の大門の下を潜る一団の練り歩き
の為だ。

振り袖新造、禿を引き連れて。錦の衣装を身の纏い、見



事に結び上げた黒髪に、金銀、鼈甲、珊瑚の簪を挿し。黒い三枚齒下駄を履いた花魁が、外八文字でゆっくりゆっくり道を行く。

今日、呼ばれたのは朝露太夫。吉原の中でも五大太夫の中に入る、最高に美しく、最上に値の張る、最上級の花魁だ。

長い睫に彩られた子鹿のような愛らしい目で真っ直ぐ前を向き、背を伸ばし、歩く。

優艶であるのに威風堂々とした、その風格。

道を歩いている者だけでなく、客引きをしている格子の向こうの女達まで色めき立つ。

華やかで、艶やかで……吉原の光を象徴するような光景。闇を象徴するそれは、今、雨月の足下に転がっていた。

塀のすぐ向こう。何本もの柳が立ち並ぶ、河原の叢の中。零れてくる華やかな光で、そこにあるものが見える。

臙脂えんじに小花の描かれた着物の残骸を纏った髑髏しやくろうだ。何かを抱え込んでいたかのように背を丸めたまま骨と化している。肉はもうないが、長い黒髪がまだ残っていた。残された物から、その死体は女のものだろうと。それしか見えない者は、そう判断するだろう。

だが、雨月はそれ以外に見えているもので、女だと確信

することが出来た。

「これが、あんたの躰か」

雨月が話しかけた者は、うつすらと透け、頭から太股まではあるが、足がなく。がっちりとした彼の肩辺りで、ふわりふわりと浮いている。辛うじて、粗末な櫛で止められている日本髪は崩れ、その下にある表情は暗く、白く。俯き、眉も目も……瘦けた頬も、口角からも、自身の不幸が滲み、止めどなく溢れていた。

それが今、雨月との会話相手……幽霊となった女だ。

「ん……？」

白い骨となっている手指と着物の残骸の間に何かを見つけ、雨月は手を伸ばす。それは、風雨に晒された紙片だった。

「こりや、手紙かな？なるほど。誰かからの知らせで、あんたは足抜けしたけど、とっ捕まって、ここで殺されたってわけか」

肯定するように、幽霊の女は項垂れ、しくしくとすすり泣く。

「こんな通りからはずれた叢に死体をほっとかれたんじゃないあ、確かに見つけられにくいわな」

雨月がこれを見つけたのは偶然ではない。



こないだ頂戴した銀色の西洋煙草入れを質に入れた帰り、この幽霊が纏わりついて離れないので、仕方なく、導かれるまま、ここまで歩いて来たのだ。

「あんたも遊女だったんだから、知ってるだろ。ここから北へ向かったら、一輪寺がある。あそこなら、お前さんも拝んで貰えるんで、自分でこのこと知らせに行きな」

ずたずたのぼろぼろになった袖で顔を隠し、女はまた、しくしくと嘆き始めた。

「って、おい……まさか、あそこまで俺に連れて行ってんじゃねえだろうな？」

涙に濡れた死者の目が、困った様子で雨月を見つめた。

「ああ、そっか。あそこに行くにや、眩しすぎて無理なのか……しゃーねえなあ。俺の袖に潜んでな。連れてってやるよ」

水に泳ぐ魚のように幽霊はくるりと輪を描き、するりと黒衣着流しの右袖に滑り込んだ。

「ほんと、しゃーねえなあ。まったく、しゃーねえなあ」

カコンカランと下駄の音に調子を合わせ、歌うみたく眩きながら、雨月は北へ歩を向けた。



二、其ハ夢ノ誘イ

『生まれては苦界、死しては一輪寺』

一輪寺は、通称、投げ込み寺と呼ばれている。

身寄りが無い、わからない。貧しい。殺害された、病死した——諸々訳有りの遊女の死体が、寺の主に断りなく投げ込まれることで有名な寺だ。

閉じた門前に死体を放置されたり、寺を囲む白塀の向こうから死体を投げ込まれることが続いた為、住職は、観音開きの門を四六時中開けておくことにした。

雨月は鷹揚にそこを潜ると、中庭を抜け、本堂ではなく、その裏にある僧堂へと下駄を鳴らしていった。

それを脱いで四段の階段を上がり、背を屈め、障子を開く。

ぱっと広がった玄関の向こうには、一本の長い廊下が延々と続いていた。左右の柱にぼつんぼつんと燭台が設けられ、そこに刺さっている蠟燭に灯が灯っているので、まったくの暗闇ではないが、それでも奥までを見渡すのは難しい。

薄暗い上がり框がまちに座り込むと、雨月はすうつと息を吸った。

「おーい、慈螢じけい。また拾って来たんだけど、なんとかしてくれよ。おーい」

低く、よく響く声で、雨月は奥に声をかけた。

暗闇の中、小さく障子の開く音がする。

奥の奥。ぼつりと丸い仄かな光が灯った。全部で四つ。小さな丸い光は、不規則に漂っている。その軌跡に幾重にも重なった円と複雑な文様が、紫煙で作る輪のように、現れてはすぐ消える。術者に従属を誓う言葉が刻まれた魔法陣の軌跡……呪痕じゅこんだ。

呪痕を作りながら近づいてくる光達の中央に人がいる。手付煙草盆をぶら下げ、墨染めの衣を纏った坊主だ。糸のように細い目。くつと上がった両の口角。雰囲気は狐のような青年——一輪寺住職、慈螢は、よう、と雨月に声をかけた。

「またかいな、雨月」

ゆつたりとした西訛りの調子で喋りつつ、慈螢は、すくと雨月の前に座った。

「弱ってるらしくて、俺らみたいなんじゃないと見えねえんだろうな。目が合った瞬間、飛んでこられたよ。んで、一



人じゃ来れないつつうから、連れて来た」

ぼんと雨月が袖を叩くと、不安げな表情をした幽霊が、そろっと顔の右側だけを出す。

「こんばんは」

その顔に向かい、楕円の細い銀縁眼鏡の中央に指を添え、慈螢は声をかける。

「そないに怖がらんでええ。僕が上に送ったるさかいな。今まで大変やったね。もう大丈夫やで」

慈螢の優しい言葉に、幽霊はすうりと雨月の袖から抜け出して来た。

「名前は……おいつ言うんか。ほいたら、おいつ。躰があるところまで、この子ら連れてって。ここまで運ばせるさかい」

慈螢がばちんばちんと二度指を鳴らすと、指先から二つの魔法陣が浮かび上がり、光の玉を一つずつ取り込んだ。魔法陣と同化した玉は、五尺五寸の慈螢と同じ大きさとなり、手足共に甲も指もない、すり棒に似た四肢をよつきりと伸ばし、顔、首、肩が一体化している不思議な人間もどきの姿へと変化した。

もう一度、慈螢がばちんと指を鳴らす。次に現れた魔法陣は、中空で掌に載るほどの大きさの虫籠に変化すると、

すうっと幽霊を吸い込んだ。人型の一つが、ひよいとそれを摘む。

「ほいたら、よろしゅう」

人型二つは慈螢に向かって恭しく頭を下げると、呪痕を作りつつ、ひゅうっと飛び立った。

「これでええやろ」

「便利だなあ、使い魔」

「まあなあ。こういう時は便利やなあ」

残った小さな光——慈螢は呪術で使役させている螢の異妖者の使い魔を、つんつんと指で弄んでから煙管に手をかける。呼吸に合わせゆっくり赤く光る火が、彼の左耳にある物をぼんやりと照らした。

それをじっと見ている雨月に気づいた慈螢は、耳朶の後ろに指を添える。

「ああ、これな。やとつけられるようになったわ」

薄い耳朶に乗っているのは、小さな虎目石。その底には金具がついていた。そこから華奢な銀鎖が一本伸び、耳の横縁、舟状窩シヤウジヤウカの形に添ってつけられている、一寸足らずの細やかな銀飾りに繋がっていた。

「耳に穴、開けるんだったつけ」

「刺青屋にやってもろてん。西洋じゃあ、ピアス言うねん



て。で、耳朶の縁についてるんはカフいうらしいわ。どつちもお洒落やる？」

「これも自分で造ったのか？」

「呪具は自分で造ったんが一番しっくり来るしねえ。そのうち、指鳴らすくらいじゃ無理な大物の魔法陣は、刺青にしてまあおこなあて思てんねん。いちいち召喚呪文唱えるより、手っ取り早いやろし」

「どんどん、坊主らしくなくなっくなあ」

と、雨月は笑った。慈螢もふふふ、と笑っている。

「でもなあ。僕らみたいなんは、自分の身いは、自分で守ってなんぼやる？」

慈螢は雨月の眼帯にふれた。

「一応、まだ役立ってるみたいやなあ」

「一応どころか、ばっちりだ」

「そらええわ。でも、今は前ほど必要やなくなったかいなあ」

と言つて、慈螢は雨月の下肢に手を伸ばす。坊主らしからぬ慣れた手つきで、腰に差された刀の鯉口を切る。すらりと姿を現したのは、銀色の刀身ではなく、竹光だ。

「鞍替えして、遊郭の用心棒になったちゅうのに、刀やのうて、こんなモンぶら下げて……」

軽いため息混じりに、パチンと刀を戻す。

「人間相手に武器なんか必要ねえんだけど、これ見てびびっちゃう奴もいるからさ。さっさとことを終わらせるには、こんなもんで充分なんだよ」

「まあ、あんたはなあ。強いしなあ。せやけど、相変わらぬの怖いもんなしなんやねえ」

「そうだな」

雨月は左目の眼帯に触れた。

「怖いとか、ほんと、わかんねえ」

「わかった時は、見物みものやろなあ」

細い目を開いて笑った慈螢の声色は、僅かに毒を孕んで響き、暗い闇に吸い込まれた。

そうやって、二人、だらりと歓談していると、玄関の隙間の向こうから、カランカランとゆっくりこちらに近づいてくる下駄の音が聞こえた。

「おや、ほんとにここに居たんだね。雨月さん」

下駄の音が止まると、酒に焼けた壮年の男の声でした。人が通れる程度に障子を開き、そつと顔を出したのは、焼継屋やまづまの惣治郎だった。

「おう、いるけど……どうした、惣治郎さん」

「いやね、なんだか不思議な夢を見てさ。ここに来れば、あんたに会えるような気がしてさ」



袂をごそごと探り煙管を取り出しながら、惣治郎は少し腰の曲がった躰を、雨月の向かいに、よっころせつと下ろした。

「こんな時間にかい」

「まあ、儂もついでだよ。茶碗の継ぎの仕事が上がったんで、大至急って言われてたから、それを届けて来た帰りさ」

惣治郎は煙管を啜え、失敬と言いつつ、煙草盆から火を頂戴する。

「で、なんだよ、夢って」

「お前さん、刀欲しくねえかい？ それも特別なのを」

訝しげに右の眉を吊り上げ、口をへの字にした雨月を尻目に、惣治郎は言葉を続ける。

「なんでも、異妖者用の刀らしいんだよ」

「へえ」

異妖者という単語に、雨月の様子が変わった。目は露骨に興味を剥き出しにし、唇をにいと捲り上げ嗤っている。それを見つめていた慈螢は、楽しそうな玩具を見つけた子供のように口角を上げた。

「なんで、俺にそんな話を？」

「どうしてなんだろうねえ。しなくちやいけない気がしたんだ。そう夢の中でね、誰かに言われたんだよ」

「只の夢の話だよな」

「まあ、そうなんだけどね。でも、気になるんだったら、どこに行けばいいか教えられるよ」

雨月は袂から巾着を取り出し、中にある西洋煙草を指に挟んだ。こちらは煙草入れとは違い質草にならなかったの喫んでしまうことにしたのだ。

「面白そうな話じゃねえか。どこなんだい？」

唇に煙草を挟んだまま喋る雨月の声は、四年間、欲していた歓喜を手中に収められる期待に色濃く染まっていた。



三、其ノ荒レタ場所

翌日。桜が綻ぶ季節だが、曇りの為か少々肌寒く。

大きな昇り龍が黒糸で刺繍された黒の着流しの上に、異人から花札で巻き上げた黒のインバネスを羽織った雨月は、惣治郎から教えて貰った場所近くで立ち往生していた。

目的地までの道のりと名字を聞いただけで地図はない。見えるものといえば、金持ちの屋敷らしい延々と続く高い白壁と、その向こうの桜や木々だけだ。

西洋紙巻きを喫みつつ、雨月は困ったなど辺りを見回していると、縞の着物に珊瑚色の道中着を纏った少女を見つけた。

十二、三歳のその子は、肩までの髪を左右に分け三つ編みにし、手には食材の入った丸い買い物籠をぶら下げ、可愛らしい声で歌いながら足取り軽く下駄を鳴らしている。

「そこのお嬢ちゃん、悪いけど道を教えて貰えねえかな？」

声に振り向いた少女は、雨月を見て、驚きに目と口をぽかんと開いた。首が折れそうなほど上を向いているのは、二尺近い身長差の為だ。

容姿で驚かれるのに慣れっこな雨月は、気にも留めず用

向きを告げる。

「この辺りに、刀鍛冶の逢梗桐おつきようどうって人の家があるって聞いたんだけど、知らねえか？」

「知ってるけど……姐さんのお知り合い、なんですか？」
雨月のことを警戒しているようで、脅えながらも少女は雨月に挑むような目を向ける。

「姐さん？」

「逢梗桐の主は、今は姐さんですけど……」

「その姐さんとは知り合いじゃあねえ。けど、そこに行けば、刀が手に入るって焼継屋の惣治郎っておっさんから聞いたんだ」

「刀……お兄さん、刀が使えるの？」

「ああ、適当に」

「そっか。じゃあ、お兄さんが使えれば……」

軽く俯き独りごちていた少女はすぐに顔を上げ、話を続けた。

「それじゃあ、惣治郎小父さんのお知り合いなの？」

「ああ。賭場や一杯飲み屋の馴染みでな」

雨月のその一言が少女に信憑性を与えたのか、あからさまな脅えの色が薄くなった。

「もう、小父さんだったら。死んだおかみさんに叱られちゃうわ」



「惣治郎さんのこと、知ってんのか」

「ご近所です。あたしは、逢梗桐さんのところで下働きしてる、千代っていいいます」

「だったら、話は早い。案内して貰っていいか？」

「はい、こつちですよ」

鳳仙花から飛び出した種のように、千代は砂利道を進む。

雨月が迷った場所から数度角を曲がると、ここです、と少女が足を止めた。

大きく無骨な石で七つの段が作られた先に竹の引き戸がある。引き戸の左横にかけられた表札には、達筆で『逢梗桐』と書かれていた。

その向こうは、あまり手入れがされておらず、庭の木々は好き放題の方を向いて伸びている。

「ただいまー」

竹の引き戸を潜り、玄關の引き戸をカラリと開けつつの千代の声に返事はない。

「あれ？もしかしたら、姐さん、縁側かも。あたしは台所の方から探します。見つけたら連れてくから、そこで待っていてくれますか？縁側は、ここから右に入っつと奥です。大きな桜がありますよ」

「無防備だな。かまわねえのか？」

雨月の問いに、あははと笑って千代が言う。

「荒事で姐さんに勝てる人って見たことないもん」

まったく心配する風もなく、会った時と同じように歌いながら、千代は奥へと姿を消した。

荒事で負けたことがない女と聞いて、どんな屈強な体軀の女なのだろうと雨月は思う。

相撲取りのように立派な体格なのか、はたまた将又、刀を振るうのに適した硬い筋肉の持ち主か……等々考えつつ、鉄の入れられていない木々や茂みが重なった道を進んでいくと、空気にふわりと桜の香りが混ざった。それに案内されるよう、奥へ進む。ふっと茂みが開けた場所へ出た。

そこは裏庭で、千代の言う通り、大きく立派な枝垂れ桜が一本、在った。樹齢五十年以上にはなっているだろう枝振りだ。

まだ固く蕾のままの花も多々あるが、気の早いものは、風に揺れ、ちらちらと花片を散らしている。

桜に見惚れている雨月を急かすように、ごう、と、強い風が広い背中を押しした。

押されるまま、雨月は童子のように、とんとんとんと飛び石の上を歩く。苔の中に浮かんでいるような不揃いの石を踏み進めていくと、縁側が見えた。

さあて、どんな頑強な女がいるのかなと、好奇心旺盛に、



雨月は縁側を覗いた。

半眼に開いていた右目が、ゆっくりと大きくなる。

縁側から沓脱石くつぬぎしの上へ、真つ直ぐな長い黒髪が垂れている。その上に乗っている花片が、まるで夜の清流に浮かんでいるのかと錯覚させるほどの艶やかさだ。

次に目に入ったのは、縁側の床へ無造作に投げ出された半開きの掌と細い手首。そして、長く白い指。曇り空の日陰の中にあるせいか、白を通り越し薄青く見える。

想像していた女とはまったく違う。繊麗だ。武器はおろか、家事もさほどしていない……働いていない女の手だ。纏っている黒い小袖の裾に、嫋やかな彼岸花が見事に咲いている。

仰向けに横たわるその肢体は、手に似付かわしい妖艶さを孕み、匂い立つばかりの麗しさ。

豊かな弧を描く胸は、少し開き気味の襟元から谷間が覗いている。

僅かに開いたふつくらとした唇は、自然の深紅に彩られている。その上にある、すうつと流れるような鼻梁。豊かで長い黒睫まつげ。瞳は白臉まなまたに覆われている為、わからない。

まったく動かないので、等身大の人形が無造作に仰向けで放置されているのかと雨月は思ったが、白い肌にうつつ

らと浮かぶ血管の青で、人形ではないと気づく。

寝ているのかどうか確認しようと、雨月はゆっくり女へと忍んだ。

途端、開いた。漆黒の夜空のような。そこに煌めく星々を凝縮したかのような。黒目がちで大きな瞳に、雨月が映る。

逆しまに雨月を見つめる女は、午睡から醒めてすぐの子供のような無垢の貌。

ゆっくりと瞬きし、再び雨月を捉えた貌は、寝起きの時以上に無垢の笑みを浮かべている。初対面の者から感じた突然の親近感を不思議に思い、雨月がじっと見ていると、深紅の唇が動いた。

「まさか、本当に呼べるだなんて思ってなかった」

少し低く響く、ゆつたりとしたその声は、麝香の甘い芳香を雨月に連想させた。

「呼んだ？」

「うん。あたしが惣治郎さんの夢に入り込んで、雨月を呼んだの。出来るとは思ってなかったけど、出来ちゃったみたい」

まだ雨月は名乗っていないのに、何故か、目の前の女は彼の名を口にした。

ここは、惣治郎が教えてくれた場所だ。もしかしたら、



夢というのは嘘で、示し合わせた二人がからかっているのかもしれない。そう思った雨月は、極上の女から目を反らせ、軽く落胆の息を漏らした。

「嘘だと思ってるの？」

「わけがわからん」

「だけど、欲しいと思ったから来たんでしょ？ これ」

雨月が目を戻すと、女はいつの間にかそれを手繰り寄せたのか。横たわったまま、抜き身の刀を胸に抱いていた。

最上の真珠のような銀白光ぎんびやくこうを放つ刀身。先は女の足の爪先を超えたところにある。長い。刀というより、太刀：

…それも野太刀と呼ぶ方がしっくり来る長さだ。

そんな刀を、寝転んだまま、女の細腕でどうやって手元に寄せたのか。という疑問が頭に浮かんだが、それよりも雨月の心を強く掴んだのは、見事なまでの刀の造りだ。

柄巻きがなく、尻に飾り紐のついたそれは、今まで手にした刀がすべて鈍刀なまくらであったような、そんな気にさせるほど、冷美を放ち、雨月の右目を虜にして離そうとしない。

「欲しい？」

静かな声が縁側に小さく響く。刹那、雨月は足先から頭の先までを指で甘く愛撫されたかのように、ぶるっと身を震わせ、強引に忘我の境から引き戻された。

気を取り直し、雨月は薄く微笑む女に向かって言う。

「そんな立派な刀を、本当にくれるのかい？」

「条件があるわ。あんたが本当に、この刀を使えるのか試し斬りして欲しいの」

「試し斬りって？」

「惣治郎さんに聞いたから、ここへ来たんでしょ？ だとしたら、これで何を試し斬るか……わかってて、わざと聞いているの？」

女はくすくす笑いながら、刀身を指でなぞる。

それを見ながら、雨月は低く囁いた。

「本当に、異妖者用の刀なんだろうな？」

「人も斬れるけど。でも、好物は異妖者なの」

だから、異妖者が斬れる——と、女が言葉を続けなくとも、雨月は理解した。

「それは、今すぐしたらいいか？」

がっしりとした長い指を左目の眼帯に添え、雨月はやりと啜う。

「夜の方が楽しそうな気がしない？」

大体の異妖者は、昼より夜、活発になる。兇暴にもなる。荒ぶる魔物に対し、対抗出来るかどうかからぬ武器だけを手に向き合えと、女は雨月に言ったのだ。

あまりに無謀で破天荒で、命を捨てるというような提案。



「ふ、く……くくつ、くくつ……無茶苦茶だなあ。無茶苦茶すぎて、楽しくなってきた」

「それじゃあ、約束」

ゆっくりと上体を起こした女は、小指だけ伸ばした右手を雨月に向けた。

女が指切りを望んでいるのだとわかった雨月も、小指を伸ばし、女に近づける。

大木に白蛇が絡まるよう、女は指を曲げた。

「ゆーびきーりげんまん。嘘ついたら、永遠に呪っちゃおっと」

「なんだ、そりゃ」

楽しそうに微笑みながら女は指をはずし、袂に手を入れた。

「時計、持ってる？」

首を左右に振った雨月の掌に、はい、と真鍮製の懐中時計を置いた。

「今夜、七時。またここへ来て。時計の見方はわかるでしょう？」

「ああ」

今のやりとりに、雨月は何か引つかかるものを覚えた。が、それは、より大きな疑問にかき消された。

まただ。また、ない。女が抱いていたはずの、あの刀が

ないのだ。

「あの刀は？」

「仕舞ったわ」

あれだけの長さの刀、鞘に入れるのなら大仰に動かなくてはならない。どこかに置くにしても、見えない場所へ移動させるほど、女は動いてはいない。

縁側。そこに接している和室の襖の影。部屋の奥にある見事な牡丹が描かれた屏風のそば。

ない。どこにもない。そこにあつたものがふつと消えた——そうとしか思えない。

あの刀をどこにやったのか。雨月が訊ねようとした、そのとき。

「どうぞ。お茶ですよ。お隣の蜷川さんからお饅頭もいただいたので、持って来ました」

最近増え始めた、珈琲、紅茶を出すカフェで働くメイドのような、襲のたくさんついた白い前掛け姿の千代が、茶と饅頭を乗せた盆を手に、とてて、と小走りやってきた。

ちよん、と縁側に座り、手際よく茶と皿を並べていく千代の頭を、女はよしよしと撫でる。

「さあ、どうぞ」

「悪い、饅頭だけ貰って帰るとするよ。戻って、仕事休むって言わなきゃなんねえし」



「お仕事って、何されてるんですか？」

「吉原の花圃楼って遊郭で、用心棒」

耳まで真っ赤になった千代をにやにや眺めつつ、雨月はひよいと饅頭を手にした。

「それじゃあ、また後でね」

「おう。ごっそさん」

ひらひらと手を振って、二、三步進んでから、はたと雨月が振り向いた。

「そういや、あんたの名前は？」

千代から茶器を受け取り、ふっと微笑んでから、女は唇を動かした。

「珠沙華^{たまさか}」

饅頭を食べながら帰って行く大男の背中を見送った千代は、とてと縁側の珠沙華の元へ戻ってきた。

「あの人、大きかったですね。髪も長くてざんばらだから、最初、人間かどうか、わからなかったです」

「大きいとは聞いてたけど、あそこまでとは、あたしも思ってたわ。ねえ、お千代ちゃん。お饅頭、全部持って帰って貰っていい？ それと悪いけど、今日の夕食の材料も」

「え……姐さん、また食べないつもりなんですか？」

「そうじゃないわ。今夜は雨月と出かけるから、外で食べるかもしれないの。もしそうになったら、折角、お千代ちゃんが作ってくれても、手をつけなかったら勿体ないでしょう。だから、ね？」

「……それだったらいいですけど。姐さん、どんどん食欲が落ちてるから、あたし、心配で……」

桜色の愛らしい唇が、心配につんと尖る。

長く白い指が、まだ幼さの残る手を物柔らかに包み込んだ。

「ありがとう。お千代ちゃん。でも、大丈夫。そんなに心配しなくていいわよ。雨月が刀を使えれば……もう大丈夫だから」

珠沙華は目を閉じて、千代の額に額を軽く押しつける。瞳を潤ませている少女は、黙ったまま、小さくこくりと頷いた。

